

〔フォトグラフィー〕メガネの歴史

ジェシカ・グラスコック著、黒木章人訳（原書房・3850円）

見た目、社会動かす

13世紀から現在まで、変幻自在に形状と意味を変えていくメガネを通して人間社会を見るファッション文化史である。

身体の弱点を補う視力矯正器具から社会的地位の象徴、叛逆のシンボル、セクハラ防止アイテム、キャラクター作りの小道具、差異化のための記号、メーカーキャップの延長にいたるまで。さまざまな職業や立場の人々の肖像画、風俗画、豊富なファッション写真



が盛り込まれ、時々における意味が読み解かれていく。メガネという小さな世界で繰り広げられる人間の無限の想像力に驚きつつメガネを介して「見る・見られる」ことの社会的な意味をつきつけられる。

著者は米ニューヨークのメトロポリタン美術館の服飾部門、コスチュームインスティテュートで10年以上研究員を務め、2003年から著名デザイナーを輩出する名門大学「パーソンズ・スクール・オブ・デザイン」でファッション

ン史を教える。

写真中心の交流サイト（SNS）になじんだ現代の学生がすんなりと入っていきける構成、つまりキャッチ力のあるビジュアルにピリツとしたコメントがつくという形式に、「今」の空気を感ずる。メガネデザイナーとして成功した3人の革新者のインタビューも差し挟まれる。生々しい舞台裏の話は、メガネでビジネスを展開したいと考える後進には大いに参考になるだろう。

19世紀末、女性参政権運動を推進した女性は、「おしゃれじゃない」メガネをかけた。女性がかけるとマイナスの評価が与えられたメガネは、男性にはとうの昔に知識と力の証しにしてダンディーを演出する装飾になっていた。だからこそ当時の果敢なメガネ女子（失礼！）たちは、男性専用とされたアクセサリーを使って女性の社会的地位を確立しようとしたのだ。

人の見た目は人の心に影響を与え、それが社会を動かす力になる。ファッションが社会を変える文化史の面白さを現代のSNS感覚で大胆に描いたポップな一冊である。

評・中野香織

（服飾史家）